

名の言語 における内包と外延

ベンヤミン『言語一般および人間の言語について』を読む

斧谷 彌守一

『言語一般および人間の言語について』 *Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen* は一九一六年、当時二十三歳の大学生だったベンヤミンによって書かれた、言葉に関する一見秘教的とも思える小論文である。全集でわずか十八頁を占めるに過ぎない小論文ではあるが、この中に、その後のベンヤミンの思想的展開の原点が凝縮された形で先取りされている、とされている。実際、その後十年ほどのベンヤミンの著作を追ってみると、『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(一九一九)における 媒質、翻訳者の使命(一九二二)における 翻訳 純粹言語、ゲートの「親和力」(一九二二)における 運命、ドイツ悲劇の根源(一九二五)における 理念 墮罪 等々のキーワードが既にこの『言語一般および人間の言語について』で使われていることが分かる。

投稿論文(1)

ただし、本論の目的は、そのようなベンヤミンの思想的展開を追うことにはない。本論が目指すのは、難解極まりない『言語一般および人間の言語について』の根幹部分を読み解き、

特にその中の 名の言語 (Namensprache) という最も重要なモチーフについて考察し、最後に 名の言語 という考えの有効性を具体例に即して検証してみることである。

この小論文でのベンヤミンの議論にはいくつかの事実誤認や自己矛盾や未整理の論点が含まれているように思われるが、本論ではそれらの点は深追いせず、議論の根幹だけを追っていくことにする。以下、いささか不自然な場合もあるが、ベンヤミン原文の Sprache には 言語、Wort には 語、^{1) 1) 1)} という訳語を一貫して使用することにする。テクストとしては、Walter Benjamin: GS, Frankfurt a.M. 1980, Bd. I, 1.を使用。本文中の()内にハイチチ数を示す。』

事物の言語と神の語

ベンヤミンの『言語一般および人間の言語について』は、伝達 (Mittelung) 精神的本質 (das geistige Wesen) 言語的本質 (das sprachliche Wesen) をめぐる難解な議論で始まる。ベンヤミンは、一方では、次のように述べる

精神的本質と、自らの中で精神的本質を伝達する言語的本質との間の区別は、言語理論的探究における最も根源的な区別である。(141)

ベンヤミンはここで、精神的本質 と 言語的本質 を峻別すべきことを説いているのだが、他方、すぐ次の段落では

精神的本質は、その精神的本質が伝達され得るものである限りでのみ、言語的本質と同一である。(142)「以下、傍点による強調はすべてベンヤミンによる」

と述べ、その精神的本質が伝達され得るものである限りでのみ、という限定付きで、精神的本質は「…」言語的本質と同一であるとするのである。精神的本質には、伝達され得るものと伝達され得ないものとがあるようだ「ベンヤミンはこの小論文の終わり近くで、伝達され得ないものの特徴が「記号」と結びつくことを指摘することになる(156)」。ベンヤミン自身もこの点には詳しく立ち入ることを避けているので、本論でもこの点には立ち入らないことにする¹⁾。

ベンヤミンによれば、事物の「精神的本質」と「言語的本質」とは根本的には異なるものだが、伝達され得る「限りでの精神的本質」は言語として伝達される、ということになるだろう。すると、事物には、自らの伝達可能な「精神的本質」を伝達する「言語的本質」(事物たちの言語(142))が備わっていることになる。もちろん、事物たちの言語が人間の言語と同じものであるはずはない。

では、事物たちが自らの「精神的本質」を伝達する際の、事物たちの言語、事物たちの「不完全な、黙したままの言語(147)」、黙したままでの「名のない言語(151)」とは何なのか。ベンヤミンは事物たちの言語を「物質的な共同性(stoffliche Gemeinschaft)(147)」、物質の「魔術(Magie der Materie)

(147)」、魔術的な共同性における、物質の伝達(151)などと呼ぶ。ベンヤミンは、このような事物たちの「物質的な共同性」についてこれ以上に具体的に述べることはないが、差し当たり、物質の物理的・化学的な相互作用のことを目しているのではないかと想像される。そこでは、物体、分子、原子レベルでの離合集散、物質の「魔術」が生起し、物質レベルで言語様のものがやりとりされている、とも言えるだろう。

だが、事物たちの言語は事物たちの「精神的本質」を伝達するものではないのか。ベンヤミンの「物質の魔術」という言い方を、物質」という側面だけに力点を置くのではなく、「魔術」という側面にも同等の比重をかけて解釈して見る必要があるかもしれない。

そもそも、事物たちはどのように存在し始めたのか。この小論文におけるベンヤミンの考察はすべて、『旧約聖書・創世記』の記述に基づいている。『創世記』から、神による「光」と「大空」の創造の様子を引用してみよう

神は言われた。／「光あれ。」／こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。(新共同訳『聖書』、『創世記』1:3-5)

神は言われた。／「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」／神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。(前掲『創世記』1:6-8)

「*io*」の「*io*」は、神の創造行為は、神の言語「*io*あれ」(*Es werde*)で始まり、神は「*io*と呼ばれた」(*Er nannte*)と「*io*」の神の言語で終わる。つまり

神の創造行為は言語の創造的全能性によって始まり、最後に、いわば、言語が被造物を自らの中に組み入れる言語が被造物に名付ける (*benennen*) ののである。(148)

「*io*」で神の言語「*io*」と言われているものは、根本的には、「光」、「大空」等の語 (*Wort*) の「*io*」であり、「*io*」、「*io*」、「*io*」等の名 (*Name*) の「*io*」である。スペンマニンによれば、神の言語は、「*io*あれ」の「*io*」と「*io*」語「*io*」であることにおいて創造するものであり、「*io*」と呼ばれたの「*io*」と「*io*」名「*io*」であることにおいて認識するものである。神の言語には、語「*io*」の絶対的な創造力と、名「*io*」の絶対的な認識力が一体的に顕現している。「*io*」神は言われた。「*io*」光あれ。」で「*io*」が創造され、神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。では「*io*」光、「*io*」闇は「*io*」夜」と名付けられる。「*io*」光あれ」という言語によって創造されるのは「*io*」光(および、事後的に「*io*」闇)、「*io*」その「*io*」光(および「*io*」闇)が名付けられた結果としての名「*io*」昼(および「*io*」夜」という「*io*」の問題が気になるところだが、「*io*」では不問に付しておく。

ただし、神は「*io*」と呼ばれた」という神の命名行為の結果としての「*io*」昼、「*io*」天」等の名を、人間の名の言語にお

ける名と混同してはならない。神の命名行為の結果としての名「*io*」昼、「*io*」天」等の日本語の名、「*io*」Tag、「*io*」Himmel」等のドイツ語の名によって表記するしかないのではあるが、実は、人間の言語のレベルとは根本的に異なつたレベルにある名である。

事物たちは、神における以外には固有名を持たない。なぜなら、神は、創造する語においてもちろん、事物たちをそれらの固有名で喚び出したからである。(155)

神の創造 = 命名行為における語「*io*」 = 名は、固有名 (*Eigenname* [*nomen proprium*]) である、と「*io*」のである。日本語の「*io*」昼、「*io*」天」等の名、「*io*」ドイツ語の「*io*」Tag、「*io*」Himmel」等の名は言ひまじもなく、普通名 (*nomen appellativum*) であり、つまりは、種族名 (*Gattungsname*) 類概念 (*Gattungsbegriff*) である。もちろん、先に述べたように、この神による、固有名、そのものは人間の言語によつては表現することができないので、「*io*」昼、「*io*」天」等の日本語の普通名、「*io*」Tag、「*io*」Himmel」等のドイツ語の普通名を用いて表現せざるを得ないのだが、神による事物たちの名が本来、固有名であるからには、普通名とはまったく違う性質を有しているはずである。

原則として、固有名は指示対象を一つしか持たない、つまり、外延がその指示対象そのものに限定されているが、逆に、内包はその指示対象の属性のすべてであり得る、という

性質を有している。このような固有名の性質を勘案すると、神の創造＝命名行為における語＝名が固有名であるということは、途方もない含みを帯びてくる。

つまり、神による事物たちの名は、外延的には、すべての指示対象を一つのものとして指示し、内包的には、一つのものとは見なされたすべての指示対象のすべての属性を包括することになる。例えば、神は「光」を創造＝命名する行為において、すべての「光」を一つのものとして創造し、すべての「光」のすべての属性を創造した、ということになるだろう。すると、神の創造＝命名行為における「光」という語＝「固有」名は、外延的にはすべての「光」を一つの「光」として名付け、内包的にはすべての「光」のすべての属性を孕むという様態で存在することになる。神は、いわば、「光あれ」という創造＝命名行為において、無限の属性を孕む一つの無限大の「光」を創造したのである。従って、例えば日本語の「光」という「普通」名が類概念として様々な光の細かな差異を抹消し平均化してしまつたのに対して、神のレベルにおける「光」という語＝「固有」名は、むしろ正反対に、さまざまな光のあらゆる細かな差異を生かし含み込むことになるだろう。

神の創造＝命名行為における語＝「固有」名は、その語の外延と内包的総体を名指すものであるからには、当然、完璧な認識力を具備していることになる。神の語＝名において、創造と認識は一致している

「…」明らかに、「神による」この名付けは、神において創造する語と認識する名とが同一であることをまさしく表現しているのである(151)

では、人間の言語は、ベンヤミンによってどのように位置づけられるのか。人間の言語は事物たちの言語とは違った特質を有しているはずだ

人間の言語の本質は、それ故、人間が事物たちに名付けるということである。(143)

この名付ける言語 (benennende Sprache) (143) が名の言語 (Namensprache) のことである。だが、先に述べたように、神の言語こそ、(創造すると共に) 名付ける言語であったのではないが。

人間の名付ける言語と神の名付ける言語とは、どのような関係にあり、どのように違うのか。人間の名付ける言語には、当然ながら、神の言語の創造する語という側面は欠けているのだが、更に

人間が事象に与える名は、その事象が人間に自らを伝達する仕方に基づいている。(150)

のであり、人間の命名行為は、事物の言語による伝達の影響下にあるようなのである。「この引用における 事象

(Sache)は事物(Ding)と同じものと見なしても差し支えないだろ(1)。

『創世記』は人間の命名行為を次のように描写している

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。(前掲『創世記』2.19)

人間の命名行為に、神が動物たちを 人のところへ持って来る という行為が先立っているし、人間の命名行為は神によって見守られている。人間の命名行為は神によって主導されているようだ

「…」動物たちを含めた「事物たちが創造される源泉となった」神の「語」だけが人間に対して、事物たちに名付けることを許すのであり、それは、「神の」語が、動物たちの黙したままのものであるとはいえず、多様な言語の中で自らを伝達することによってである。「神の」語が自らを伝達する様子を示しているのが、神が動物たちに順番に合図(Zeichen)を与えるというイメージである。この合図に従って、動物たちは名付けられるために人間の前に歩み出るのである。そのようにして、ほとんど崇高といっていやり方で、黙したままの被造物が神と結ばれる言語共同性

(Sprachgemeinschaft)が合図というイメージにおいて与えられている。(152)

神の合図こそ、事物たち「動物たち」が人間に名付けられるために人間の前に歩み出るといふ事態を可能にしている。黙したままの被造物は、合図という言語様のもことによって神との言語共同性を分かち持っている。『創世記』によれば、神の合図に従って、名付けられるために人間の前に歩み出るのは、動物たちだけであって、事物たち一般ではないのだが。

では、神の合図によって事物たち「動物たち」が人間の前に歩み出た後には、人間は自らの意志によって自由に事物たち「動物たち」に名付けることになるのだろうか。ペンヤミンによると、そうではない。人間が事象に与える名は、その事象が人間に自らを伝達する仕方に基づいているのであり、その事物たちの言語において「神の」語が自らを伝達するからである

人間が事物たちの黙したままで名のない言語を受け取り「受胎」(empfangen) 音声によって名の中へと移行させることによって、人間はこの「名付けるといふ」課題を解く。もし人間の名の言語と事物たちの名のない言語が神において血縁関係にあるのでなければ、もしそれら二つの言語が「神の」同じ創造する語から解放されたのでなければ、事物たちにあつては魔術的共同性における物質の伝達となり、

人間にあっては至福の精神における認識と名の言語となっている「神の」同じ創造する語から解き放たれたのでなければ、この「人間が名付けるといふ」課題は解くことができないだろう。(151)

人間は 事物たちの黙したままで名のない言語 を音声のある 名 の中へと移行させるのだが、人間にそのような移行作業が可能であるのは、そもそも 事物たちの名のない言語 も 人間の名の言語 も「神の」創造する語 という同一の起源を有し、根本的には同一の性質を帯びているからである。神の言語 事物たちの言語 人間の言語という、神に発する言語の一貫した流れが存在するようだ。

人間は自然の事物たちに宿る「神の」創造する語 を受け取る「受胎する」ことによつて、事物たちに名付ける。事物たちに宿る 神の語 とは、先に挙げた 魔術的な共同性における、物質の伝達 のことである

この「人間の」受容「受胎」は、事物たち自身の言語へと向けられている。事物たちからはまた、音もなく、自然の黙したままの魔術において、神の語が輝き出てくる。(150)

結局、人間が 受胎 する 事物たちの名のない言語 は 神の語 に淵源し、そこから 神の語が輝き出てくる。だからといって、事物たちの言語が 神の語 そのものであ

るわけではない

自然に人間が名を与えるのは、人間が自然から受け取る「受胎する」伝達によつてである。なぜなら、自然全体にも、名のない黙したままの言語、創造する神の語の名残 (Residuum) が浸透しているからである[…](157)

名のない黙したままの言語 である事物の言語は、創造する神の語の名残 ではあつても、神の語 そのものではない。しかし、そこには、創造する神の語 の創造の息吹が残っている。ベンヤミンが事物の言語の記述に際してしばしば 魔術、魔術的 という語を使うのは、事物の言語の 創造する神の語の名残 という性質を示唆するためであらう、と思われる。

すると、創造する神の語の名残 としての事物の言語を、単に、物体、分子、原子等の純粹に物質的なレベルでのみ想定するのでは、済まないように思われてくる。物質の魔術 は、神の創造的 魔術 の 名残 のことを目しているのではないが、人間が自然から受け取る「受胎する」伝達 において人間に伝達されるのは、事物たちから発してくる神の創造の息吹の 名残、ある種の靈気のようなものでないか。「神の」語が自らを伝達し つつ事物たちに与える 合図 (Zeichen) とは、靈的な 兆し (Zeichen) のようなものではないか(事物たちが伝達する 精神的本質 とは、このような神に淵源する靈的な 兆し であつたのではないか)。人

間はこの靈的な 兆し を 受胎する ことによって、その 兆し を事物たちの 名へと移行させるのではないが。ベンヤミンは、この移行のことを 翻訳 (Übersetzung) と呼ぶ。人間が事物たちに名付ける行為は、事物たちの言語の、人間の言語への翻訳 黙したままのもの、音声的なものへの翻訳 名のないものの、名への翻訳 (151)である。この 翻訳 は人間の自由意志によって恣意的に行われるのではなく、事物たちの名のない言語 の 孕む 創造する神の語の名残 に基づいて行われるのである。結局

「…」この翻訳の客観性は神において保証されている。(151)

といつこととなる。
かくして、創造する神の語¹¹⁴⁴ その 名残 としての 事物たちの名のない言語 その 受胎 翻訳 としての 人間の名の言語 という形で世界を貫流している言語の流れが存在していることになる。すると、人間はこのような言語の流れの最終的な頂点に位置していることになるのだろうか

あらゆる自然は、それが自らを伝達する限り、言語の中で自らを伝達する 従って、究極的には、人間の中で伝達する。それ故、人間は自然の主人 (Herr) であり、事物たちに名付けることができる。(144)

人間は 自然の主人 だといつベンヤミンの規定は、決して、人間を自然の頂点に定位する単なる人間中心主義などではなく、人間が、世界を貫流する言語という 媒質 の 枢要 な中継点であることを示唆しようとするものである

名において、人間の精神的本質は自らを神に伝達する。(144)

創造する神の語¹¹⁴⁵ に端を發した言語の流れは、こうして、事物たちの名のない言語 人間の名の言語 を経て、その起源である神へと還帰していくことになる。

このように世界を貫流する言語の流れの一貫した様態を、ベンヤミンは 媒質 (Medium) と呼ぶ。神 事物 人間 神という形で流れる言語は、元々神に淵源する同一の言語、同一の 媒質 である。それぞれの段階での質的な差異は、同じ言語という 媒質 のそれぞれの段階での 密度 (Dichte) (146) の違いに由来するようだ。この 密度 の違いは、存在の程度 (Existenzgrade, Seinsgrade) (146) に発する段階的な違いである。ベンヤミンがそこで、ス「ラ字 (146) に言及しているように、あらゆる精神的存在を貫く位階 (Abstufung) (146) のあり方には、例えば、ホイジンガが『中世の秋』で描写した、すべてのものが神の位階秩序の中でキラキラと輝く様を思わせるものがある。

ベンヤミンがホイジンガと異なるのは、この神の位階秩序の中に貫流しているのが言語という 媒質 であるとする点

である

ある本質の言語は媒質であり、その媒質の中でその精神の本質が自らを伝達する。この伝達の絶え間のない流れが自然全体を貫いて、最も低次の存在物から人間へと、人間から神へと流れている。(157)

そのように、段階を経巡りつつ、言語という媒質が世界を貫流しているのだが、この貫流の開始点も終着点も神に存しており、世界を貫流する言語という媒質は、根本的には「このよつな言語運動 (Sprachbewegung) の一体性である、神の語 (157) に他ならぬ」。

人間の言語 名の言語

ベンヤミンは、『創世記』に従って、人間の言語のあり方を先ず、人間の墮罪・樂園追放の前と後とで截然と分ける。墮罪以前の樂園には、人間の言語は一つしか存在しなかった

人間の樂園的言語 (die paradiesische Sprache des Menschen) は完璧に認識する言語であったに違いない。(152)

樂園言語の完璧な認識力は、第 7 章で引用した 神において、創造する語と認識する名とが同一であることとい

う 神の語 = 名のあり方を、樂園言語が分有していることに由来するだろう。もちろん、人間の樂園言語はもはや 神の語の創造力を有してはいないが、名の言語であり、名という唯一の至福の樂園言語 (die eine selige Paradiesssprache der Namen) (155) である。樂園言語が名の言語であるからこそ、そこには完璧な認識力が具備していることになる。なぜなら、第 7 章で述べたように、神が事物たちに名付けた「固有」名は、その名の外延と内包の総体を名指すものであるからこそ、完璧な認識力を有しているのだが、人間の樂園言語 = 名という純粹言語 (die reine Sprache des Namens) (153) にも、神の語に発する名の永遠の純粹性 (153) が残存しているからである。樂園に人間の言語が一つしか存在しなかったのは、その唯一つの言語が完璧な認識力を具備していたので、認識の足りなかつた部分を他の言語で補う必要がなかつたからではないか。樂園において人間は、神に発して世界を貫流する名の言語の内在的な独自の魔術 (153) の中にあり、例えば「草」や「獣」を、それらの外延と内包の総体を名指す名において完全に認識し、理解することができたであろう。名の言語は、言語以外のものを伝達するための手段としての言語ではない

名は、それを通じて (durch) はもはや何ものも自らを伝達することはなく、その中で (in) 言語がそれ自体で絶対的に自らを伝達するものである。(144)

ヘンヤミンは、言語が 精神的本質 を伝達する 媒質 であることを指摘する際に、「この 媒質 が それを通して 伝達される 手段 ではなく、その中で 伝達される 媒質 であることを強調する。名の言語 においては、言語が言語 自体の中で言語自体を伝達する。

「…」おのおの言語は、自らの中で (in) 自らを伝達する。おのおの言語は、最も純粹な意味において伝達の『媒質』(Medium) である。中動態である「*ich* (das Mediale)」のことがあらゆる精神的本質の無媒体性「無手段性、直接性」(Unmittelbarkeit) であるのだが、は、言語理論の根本問題である。(142)

中動態 はここではギリシア語動詞の 直接再帰中動態 のことであると思われる。直接再帰中動態 は、自分自身を「する」という(再帰的) 能動態が、自分自身が「される」という受動態でもあるという動詞のあり方のことである。名の言語 においては、言語が言語自身を伝達すること、即ち、言語自身が伝達される ことである。従って、このような伝達のあり方においては、言語が言語外の何かを伝達するための 媒体 (手段) (Mittel) ではない。従って、言語の内容 (Inhalt) など存在しない。(142) のである。

「*ich*」のように、言語の内部で伝達が生起するあり方が、名の言語 における 内在的な独自の魔術 である。名の言語 は、自らの外部にある何かを伝達するのではなく、自らの中

で自らを伝達するのだから、ここでは、外部から内部への転送に伴う質的变化やロスが生じることなく、言語の内部で丸ごとの完璧な伝達が行われることになる。つまり、ここでは、絶対的に自らを伝達する ということが可能となるのである。

名の言語 における丸ごとの伝達、絶対的な伝達は、具体的なもの の伝達における無媒体性「直接性」(Unmittelbarkeit) (154) であり、事物たちを直観すること (Anschauen) において事物たちの言語が人間に流れ込んでいく (154) というあり方である。このような伝達においては、転送に伴う、伝達されるものの 抽象化 は生じない。楽園言語 としての 名の言語 には、事物たちを直接的に直観する完全な認識力が備わっている。

ところが、アダムとエヴァは蛇の誘惑に負けて善悪の認識の木の実を食べる。こうして、神の語、ヘブライ語による創造の度に神はこれを見て、良しとされた 世界に、善悪の分裂が持ち込まれる。人間の言語は、言語の外部にある何かを伝達するための手段と化したのである。こうして、人間の言語は、事物そのものを認識する 名の言語 から、事物を外からあれこれ詮索する おじゃべり (Geschwätz) 善悪についての おじゃべり (153) 善悪を 裁く語 (das richtende Wort) (153) へと類落す。

墮罪が人間の語の誕生の刻である。人間の語においては、名はもはや無傷のままでは済まず、人間の語は名の言語、

認識する名の言語の中から 内在的な独自の魔術の中から、
と云っていいだろう。抜け落ち、表現的に「表出的に」い
わば外部から魔術的になった。語は、(自分自身の外部の)
何かを伝達すべきものとなる。(153)

人間の語が(自分自身の外部の)何かを伝達する とい
うことは、伝達する言語と、言語によって伝達されるものが
分離しているということ、伝達されるものは言語を 手段
(Mittel) (153) として伝達されるといふことである。このよ
うな言語のあり方は、まねく 単なる記号 (das bloße
Zeichen) (153) としての言語である。

伝達されるものから分離された伝達の 手段 としての
記号 からは、名の言語 の直接的な認識力が失われる

墮罪において、抽象の伝達におけるこのような直接性
(Unmittelbarkeit) が裁きを伴いつつ出現したのは、人間が
具体的なものの伝達における直接性「無媒体性」
(Unmittelbarkeit) から、つまり、名から離れ去り、あらゆる
伝達の間接性「媒体性」(Mittelbarkeit) の深淵、つまり、
手段「媒体」としての語 空虚な語の深淵へと、おしゃべ
りの深淵へと陥ったときだった。(154)

ここで、墮罪後の 手段 としての言語についても 直接
性 といふことが言われているが、この 直接性 は 具体
的なものの伝達における直接性 から離れ去った あらゆる

伝達の間接性 のレベルで生じる 直接性、あくまでも 抽
象の伝達における直接性 である。

伝達される事物たちの 精神的本質 と、それを伝達する
手段 (媒体) (Mittel) としての言語がこのように分離する
と、名の言語 におけるように、言語の内部で丸ごとの完璧
な伝達が 直接的に「無媒体に」(unmittelbar) 行われるこ
とはなくなり、伝達は 間接的に「媒体を通して」
(mittelbar) 行われることになるので、事物たちの 精神の本
質 が 媒体 としての言語へと転送される際に、具体的な
ものが抽象化され、伝達されるものの口入、質的变化が生じ
てしまふことになる。

すると、事物たちの(伝達され得る) 精神的本質 のなに
がしかのものが失われてしまうので、そこで生じた認識の欠
落を埋めようとして、別の言い方、言語が生起することにな
る。これが、バベルの塔の建設で生じた 言語の混乱 (152)、
言語の多様性 (154) の原因である。事物たちの 精神の本
質 が直接的に丸ごと具体的に伝わってこないで、どんな
に多様に言い換えてみても、いつも間接的、抽象的なままに
留まり、認識の欠落感(隔靴搔痒の感) が残留するのである。

このような多様な言い換えのことを、ヘンヤミンは「事物
たちの言語からの」かくも多くの翻訳 (152)、過剰な名付
け (Überbenennung) (155) と呼ぶ。事物たちは 過剰な被
規定性 (Überbestimmtheit) (156) を被っていることになる
のだが、逆説的なことには、この 過剰な被規定性 はどこ
までも過少なままである。事物たちがどんなにかえひつ

かえ規定されてみて、事物たちは十全には規定されないままであり続ける。こつして生じざるを得ない多様な言い換え、過剰な名付けの現実的なあり方が、日本語とかドイツ語とかの多様な言語、そこでは名が既にしおれてしまった何百もの人間言語(150)に他ならない。

単なる記号としての言語は、言語学・記号論で定義される言語の有りようそのものである

伝達的手段は語であり、伝達の対象は事象であり、伝達の受信者は人間である。(144)

言語外の事象を伝達する 手段としての 単なる記号について、ベンヤミンは、ソシユル的な言語記号の恣意性を指摘する

語と事象との関係は偶然的であり、語は、何らかの慣習によって措定された、事物たちの(あるいは、事物たちの認識の)記号であるという観念[...] (150)

言語記号は、恣意的な成り立ちをしているが故に、慣習(コード)によって縛らざるを得ないという逆説は、ソシユールがつとに指摘したところであった。

ベンヤミンによれば、墮罪後の人間の言語は、直観の言語から分析の言語へと墮している

神の語の絶対的に無限定で創造する無限性と比較すると、あらゆる人間の言語の無限性は常に、制限された分析的な本質のものであり続ける。(149)

墮罪後の人間の言語は、名の言語 とはいっても、具体的なもの伝達における直接性 から離れ去り、あらゆる伝達の間接性 のレベルに墮し、抽象的な認識と分析の言語と化したのであり、「神の」語の、名における反映(149)は希薄なものとなっている。

それにもかかわらず、人間の 名の言語 は、世界を貫流する 神の語 に与っている。『創世記』によれば、神はそもそも人間を、他の事物たちとは本質的に異なる仕方でも創造した。神は人間を、他の事物たちのように「あれ」という語 によってではなく、土 から造った後に 命の息を吹き入れられた。ベンヤミンは、この 息 は 同時に命であり精神であり言語である と言つ(147)。人間だけに、言語という贈り物(148)が授けられたのである。人間は、自ら名付けるものとなった。

人間が名付ける行為には、二つの場合がある。一つは人間が「動物たちをも含む」事物たちに名付ける場合である。この場合は、先に見たように、人間の名付けに、神が事物たちに与える 合図(兆し)が先立っており、人間の名付けは、事物の言語に残存する 創造する神の語の名残 を人間が受容する「受胎する」ことによつて行われた。

このように、人間の名付けが 創造する神の語の名残 を

事物たちにおいて 受容する「受胎する」することによって生起するとしても、そこでは、人間による 黙したままのもの、音声的なものへの翻訳 名のないものの、名への翻訳 (151) が行われ、そこに人間の 自発性 (Spontaneität) (150) が介在してくる。ベンヤミンによるこの 自発性の位置づけはもう一つはつきりしないが、この人間の命名行為における 自発性 が墮罪後の言語の抽象性、「事物たちの言語からの」かくも多くの翻訳、過剰な名付け につながつてくるのではないか、と思われる。

人間が名付ける行為のもう一つの場合は、人間が人間に名付ける場合、つまり、人間の 固有名 の場合、人間が自分の子供たちに命名する場合である。ベンヤミンによれば、人間の 固有名 は、その語源的な意味(例えば「ベンヤミン」という名 はヘブライ語の語源では 右手の息子、幸運の子 という語義を持っている)に及ぶるものではなく、人間の音声の形を取った神の語 (150) である。従って、人間の 固有名 には 神の語 の創造する力が宿っている

「…」このような意味において、固有名自体が創造するものであることは、人間の名は人間の運命であるという直観の形でこのことを「…」神話の知恵が言い表している通りである。(150)

人間はその 固有名 において自らの 運命 を創造する、
 というのである。

我々は先に、神による創造「命名行為における 固有名 は、外延的にはすべての指示対象を包括し、内包的にはすべての指示対象のすべての属性を包括する、と考えたのだが、創造力を孕むという、人間の 固有名 の場合はどうなるのだろうか。

確かに、人間が自分の 固有名 において豊穡な 運命 を創造していけば、その 固有名 は無限の属性を孕むことになるだろう。だが、その 固有名 はその人しか名指さないのだから、どこまで行っても外延が広がることはあり得ないのではないか。その 固有名 の内包が総体性に近づいていけば、その 固有名 は人間のあらゆる属性を含み込んでいくことになるが故に、その 固有名 は外延的には、一人の特定の間を名指す 固有名 でありつつ、いわば、あらゆる人間を包括する普遍性に近づいていくことになる、ということなのだろうが。

何れにしても、人間の 固有名 は別格として、墮罪後の人間の言語は、手段 としての 記号 であり得ないのだろうか。一般には、文学の言語は 記号 としての言語とは違うレベルにある、とされる場合が多い。実際、文学の言語、特に詩の言語においては、一語一語の姿形が問題となる。姿形が問題となる言語は、単なる 手段 としての言語ではあり得ないはずなのだが。

ベンヤミンは、一方では、文学 (Poésie) の言語をも含めて芸術の言語は 事物的な言語精神 (147) に基づいているとするが、他方では、文学の言語を彫刻、絵画の言語とは区

別し

何れにしろ、それでもやはり文学の言語が、人間の名の言語にも それだけではないにしても 基礎を置いているもの[...」（156）

と述べ、文学の言語の基底に 名の言語 の要素を認めている。

名の言語 における内包と外延

ヘンヤミンは、文学の言語の基底に 名の言語 の支えがあることを認めている。墮罪以前の人間の 名の言語 について、更に具体的に考えてみたい。

第 4 章で、神による事物たちの「固有」名は、外延的には、すべての指示対象を一つのものとして指示し、内包的には、一つのものに見なされたすべての指示対象のすべての属性を包括することになる、と述べた。何しろ、神は事物の「固有」名 によって一切のその事物を創造したのであるからには、その「固有」名 は一切のその事物の存在と、一切のその事物の一切の属性を包括することになるはずである。

では、人間言語の遺産としての名（144）の場合はどうなのか

このようにして、絶対的に伝達され得る精神的本質とし

ての言語の内包的総体性（intensive Totalität）と、普遍的に伝達する（名付ける）本質としての言語の外延的総体性（extensive Totalität）とが、名において頂点に達する。（145）

ヘンヤミンが、墮罪以前の人間の 名の言語 は内包的にも外延的にも 神の語 に比肩する 総体性 を備えていたと想定していることが分かる。「現代の論理学では、内包には Intension、内包的には intensional、外延には Extension、外延的には extensional を使るのが通常のようになったが、Intensität intensive Extensität extensive もそれらの語とまったく同じ語源を有しており、かつては論理学の術語としても使用されていたものなので、Intensität intensive Extensität extensive をそのような論理学上の術語として扱うことにする。もっとも、ヘンヤミンは、外延 = Extensität の代わりに、普遍性を意味する Universalität を使っている。内包には Inhalt、外延には Umfang という言い方もあるが、ヘンヤミンは前者の Inhalt を 内容 という普通の意味で使っている」

名 のあり方を内包的側面から見ていく。各々、自分自身を言ひ表す（sich selbst aussprechen）こと（145）、言語の究極的な叫び（Ausruf）（145）である。名 は何を言ひ表し、叫ぶのか。事物たちの 精神的本質 を、である。

それ故、精神的本質は初めから伝達され得るものとして置かれる。とうよりむしろ、まさしく、伝達され得る可能性の中へと(17)置かれるのである[...](145)

「つまり、事物たちは名の中で、自らの精神的本質を、つまり、伝達され得る 自らのさまざまな属性を 言い表し、 叫ぶ、のである。」

外延の側面から見れば、名 は あらゆる他のものに話しかける (alles andere ansprechen) こと(145)、言語の本来的な呼びかけ (Anruf) (145) である。あらゆる他のもの話しかける こと は、普遍的な名付け (universelle Benennung) (145) とも呼ばれる。名 は、普遍的に伝達する(名付ける)本質としての言語 (145) であり、その名の あらゆる指示対象に 話しかけ、 呼びかける のである。

名の言語 は、内包的には、その名の事物のあらゆる属性を 伝達され得る ものとして 言い表す、つまり、自分自身を言い表す のであり、外延的には、その名の あらゆる事物たちに 伝達する(名付ける)、つまり、その名の あらゆる指示対象に 話しかけ、 呼びかける のである。「つまり、名 において、 内包的総体性 と 外延的総体性 が同時に顕現することになる

人間だけが、「外延的」普遍性と内包性 (Intensität) の点で、完璧な言語を有している。(145)

このような 名の言語 の最高のあり方が 啓示 において範例的に出現する。ヘンヤミンも指摘するように、言語をめぐる考え方には、言い表されたもの、言い表され得るものと、言い表され得ないもの、言い表されていないものとの対立 (146) が見られる。一般には、究極的な精神的本質は 言い表され得ない と見なされる (146)。神性の 啓示 のような事柄は言語では、言い表され得ない、というのが一般的な考えである(例えば、ユタヤ教においても、神の名は本来的には、言い表され得ない ものであった)。ヘンヤミンによれば、むしろ、神性の 啓示 のような事柄こそ、言語によって 言い表され得る のであり、 啓示 は、 言い表され得る からこそ、 啓示 なのである

(啓示という概念における) 宗教の最高の精神領域は同時に、 言い表され得ないものなどない唯一の領域である。なぜなら、この最高の精神領域は名の中で呼びかけられ、 啓示として自らを言い表すからである。(147)

神性の 啓示 のような 最高の精神領域は名の中で「外延的に」呼びかけられ、 啓示として「内包的に」自らを言い表す のである。 啓示 においては、世界総体の秘密が現れるのだから、名 における 啓示 の瞬間には、 全き 内包的総体性 と全き 外延的総体性 とが同時に出現することになるのだ。

ヘンヤミンの友人だったショーレムも、 啓示 についてベ

ンヤミンと同じ考えを抱いていた。啓示の言語の典型が例えは『聖書』(聖なるテキスト)だが、シヨールムは、ユダヤ神秘主義における啓示の出現について、次のように述べている

神秘主義者は聖なるテキストを変容させるのだが、このよつな変容の決定的な要素の本質は、硬くて、一義的とも言つていい、誤解しよつのない、啓示の語が、今や無限に意味の充溢したものとなるといふ点にある。(Gersthom Scholem: *Zur Kabbala und ihrer Symbolik*. stw13. Frankfurt a.M. 1981, S.21)

シヨールムの言つ、啓示の語^{141,142}における無限の意味の充溢は、ペンヤミンの言い換えれば、全き内包的総体性と全き外延的総体性の顕現ということになるだろう。随罪以前の楽園言語としての人間の名の言語は、そのよつな啓示における言語の性質を帯びていた、ということになるだろう。

『言語一般および人間の言語について』におけるペンヤミンの議論は、このよつに、記号としてのあり方を超える言語の最高の可能性を考究しようとするものだが、その議論は抽象的なユダヤ教神学的な色に色濃く染まっており、人間の言語の具体的なケースに本当に当てはまるのか、という疑義を掻き立てる。

この小論文でペンヤミンが挙げている具体例と言えるもの

は「Lampe」(ランプ、電灯、電球)(142,143)、「Gebirge」(山脈、山地)、「Fuchs」(狐)(143)だけであり、数が少ないだけでなく、それらのわずかな例も何ら具体的に展開されていない。唯一、具体的な展開に近い箇所を引用してみよう

例えば、このLampeの言語はLampeを伝達するわけではない(なぜならLampeの精神的本質はその精神的本質が伝達され得るものである限り、断つてそのLampeそれ自体ではないからである)。そしてなぜ、このLampeの言語は、言語-Lampeを、伝達の中のLampeを、表現の中のLampeを伝達するのである。なぜなら、言語の中では、事情は次のようになっていくからである。事物たちの言語的本質は、その事物たちの言語である。(142)

ペンヤミンの考えに従えば、このLampeの言語は「言語記号「Lampe」の物質的な指示対象としての」Lampeを伝達するわけではないのは、当然である。事物たちの言語的本質は、その事物たちの言語である。このリナーゼは「Lampe」に当てはめれば、Lampeの言語的本質は、そのLampeの言語である。このリナーゼになり、Lampeの言語、言語-Lampe、伝達の中のLampe、表現の中のLampeのあり方が問題となる。

我々としてはここで、微細なニュアンスをも逃さない議論をするために、「電球」という語の使われた日本語の短歌を素材にしてみよう。「ペンヤミンが挙げているドイツ語の

「Lampe」は、ランプ、電灯、電球 等の意味を持っている。「電球」の場合は、「Güthlampe」「Briney」「Güthbirne」等の言い方もあるが、「Lampe」が「電球」の意で使われることもある」

わが内蔵のうらがはまでを照らさむと電球涯なく呑みく
だす夢（辰口泰子）

光源としての「電球」は通常、物体・身体の表側・外側を照らす ものだが、この短歌では、物体・身体の裏側・内側を照らす ものなるうとしてゐる。「電球」によつて身体表面を照らされると、その「電球」は、心の表面を照らしている ように思われるのだが（一般には「電球」の灯りが心を暖める 感覚が伴う。青白い光線は逆に、心を冷やす こともある）、その「電球」が、内蔵のうらがはまでを照らす といふことになる。その「電球」は、心の裏側をも照らす ような気配を帯びてくる。

「電球」は辺りを照らし出し、そこに 光の輪を出現させる。逆に、光の当たらない反対側に 影を作り出す。この短歌では、「電球」が 呑みくだされ、内蔵のうらがはまでを照らす ことになるので、光と影の位置関係が反転することになるだろう。通常は光が届かず影になる内側に光の輪が広がり、光の尽きる外側に影が生じることになるだろう。

「電球」は、辺りを照らし出すことによつて、そこに 光に包まれた小宇宙を出現させる。ここでは、光に包まれて出

現する小宇宙は、内臓の内側の風景という異様な風景である。「電球」にはまた、辺りを照らし出しつつ見ている という感じがつきまとう。「電球」が 呑みくだされると、普段は隠された内臓の内側の異様な光景が見られてしまうという感覚が生じる。

一般には、「電球」はどこかの位置に電気具として 固定されている ものだが、その「電球」を 呑みくだそう とするからには、その「電球」はどこかに自由に手に取る ことのできるものとして存在し、手に取つて 宙に浮かせる ことのできる（宙に浮くことのできる）ものでなければならぬ。この「電球」はそのように自由に手に取る ことのできるものであるからこそ、手にとつて 呑みくだす ことができるのである。

通常、「電球」は電気具として固定され、電線を通して 電気エネルギーを供給されている。だからこそ、「電球」は 白熱し 光ることができる。あくまでも 照らす ためにこの「電球」は 呑みくだされようとするのであるからには、この「電球」は電気エネルギーを供給されねばならない。ここで 呑みくだされた「電球」はどこから電気エネルギーを供給されて光ることができるのだろうか。もしかすると、この「電球」は中空から電気エネルギーを取り込むのかもしれない。何れにしても、呑みくだされた「電球」は 白熱し、内臓を熱く焼き焦がす怖れがある。この短歌を読んで感じる恐いという感覚の一半はこの焼き焦がす白熱から来ているだろう。

「電球」は一般には ガラスでできている。だから、「電球」には 割れやすい という危険性があり、割れた破片が鋭利な刃物になる という恐ろしさを秘めている。この短歌の怖さの相当の部分は、狭い食道を通して、呑みくだされ「電球」は割れて破片になるかもしれないという感覚から生まれてくるだろう。「電球」は 球形をしている。この短歌では、呑みくだされた「電球」は内臓の形に(例えば、胃や子宮の形に)フィットするかもしれないという異様な感覚が感じられる。フィットするから余計に「電球」の割れやすさが増幅されるといってもありそうだ。

普段意識されている「電球」という語の内包、つまり、「電球」の属性は、フィラメントが発光して光源となるガラスの球 程度のものだろう。これはほとんど、「電球」という語の概念的意味の構成を超えないものである。ところが、辰巳泰子の短歌からは、上述のような実に様々な内包が浮かび上がってくる。それをまとめたものが、図1である。「電球」という語の内包が 内包的総体性 に近づいていく様が見て取れるだろう。

次に、「電球」という語の外延を見ていこう。もちろん、この短歌でも表面的には差し当たり、「電球」という語は「電球」だけを指示している、としか言えないだろう。しかし、この短歌から感じられる含みからすれば、様々な指示対象の可能性が生じてくる。涯なく という言い回しから 宇宙 のイメージが生じるので、そこに、宙に浮いて照らし出すというイメージが重なって、光る天体(例えば 太陽 月 星

「宇宙空間から見た、光る」地球)が思い当たるし、辺りを照らし出すものというイメージから、光の輪の中心 であるものが思い浮かぶし、呑みくだされ内臓の中に入っていくイメージから、ベニス も想起される。更に、内臓に収蔵されて内側から照らすというイメージから、胎児 の姿が浮かび上がってくる。「電球」という語は、様々なイメージを孕むことによつて、電球的なもの 一切を指し示す域へと、つまり、外延的総体性へと近づいていくことになる。このことをまとめたのが、図2である。

こうして、文学の言語(特に、詩の言語)が内包と外延を限りなく押し広げることによつて 内包的総体性 と 外延的総体性 に近づいていこうとする運動体であることが、分かるだろう。運動体としての言語について、ベンヤミンは『聖書』との関連で、ただその展開においてのみ考察されるべき、説明しがたく神秘的な究極の現実としての言語(117)という言い方をしている。ベンヤミンの『言語一般および人間の言語について』における言語論は、ユダヤ教神秘主義の臭いが色濃いではあるが、人間の 名の言語 が、言語の最高のあり方において顕現する 内包的総体性 と 外延的総体性 を目指して運動している、という考え方は、ユダヤ教神秘主義を離れてもなお有効であると思われるのである。

先ほどのショーレムからの引用を借用してみよう 辰巳泰子の短歌においては、硬くて、一義的とも言っていない、誤解しようのない、「電球」という語が、今や無限に意味の充溢したものとなるうとするのである。文学(詩)の言語のみな

らず、人間の言語は根本的には、そのような意味での「名の言語」であり、ただその展開においてのみ考察されるべき、説明しがたく神秘的な究極の現実としての言語である。人間の心の現実には、そのような言語によって担われている。

図1 「電球」の内包

光源である	影を作り出す	ガラスでできている
物体・身体の表側・外側を照らす	呑みくだされる	割れやすい
物体・身体の裏側・内側を照らす	光に包まれた小宇宙を出現させる	割れた破片が鋭利な刃物になる
心の表面を照らす	辺りを照らしつつ見ている	球形をしている
心の裏側を照らす	固定されている	
心を暖める	宙に浮くことができる	
心を冷やす	電気エネルギーを供給される	
光の輪を出現させる	白熱する	

投稿論文(1)

図2 「電球」の外延

